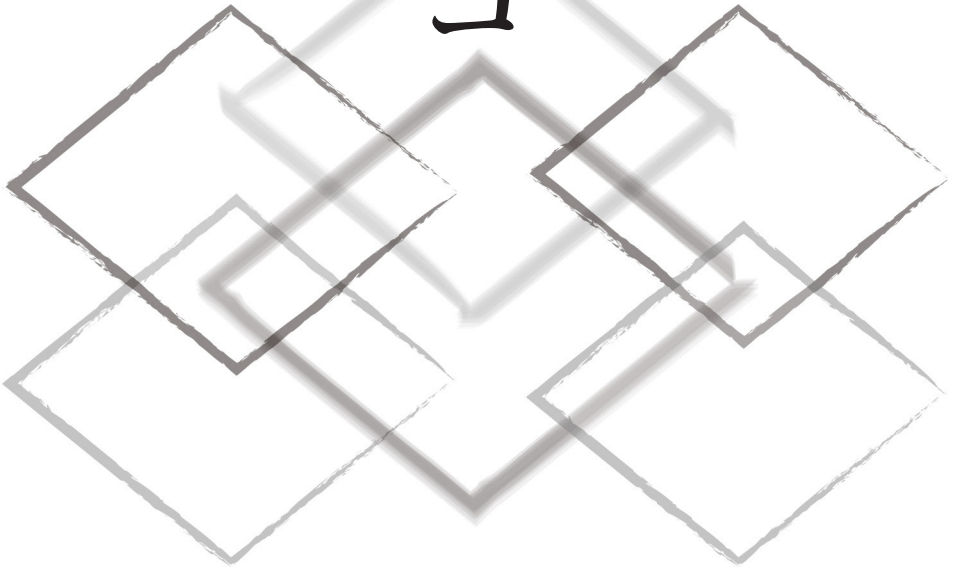


芥川 竜之介

トロツコ



一冊堂青空文庫



トロッコ

芥川龍之介

小田原熱海間に、軽便鉄道敷設の工事が始まったのは、良平の八つの年だった。良平は毎日村外れへ、その工事を見物に行つた。工事を——といったところが、唯トロッコで土を運搬する——それが面白さに見に行つたのである。

トロッコの上には土工が二人、土を積んだ後に佇んでいる。トロッコは山を下るのだから、人手を借りずに走つて来る。煽るように車台が動いたり、土工の袷天の裾がひらついたり、細い線路がしなったり——良平はそんなけしきを眺めながら、土工になりたと思う事がある。せめては一度でも土工と一しよに、トロッコへ乗りたいと思う事もある。トロッコは村外れの平地へ来ると、自然と其処に止まつてしまう。と同時に土工たちは、身軽にトロッコを飛び降りるが早いか、その線路の終点へ車の土をぶちまける。それから今度はトロッコを押し押し、もと来た山の方へ登り始める。良平はその時乗れないまでも、押す事さえ出来たらと思うのである。

或夕方、——それは二月の初旬だった。良平は二つ下の弟や、弟と同じ年の隣の子供

と、トロツコの置いてある村外れへ行つた。トロツコは泥だらけになつたまま、薄明る  
い中に並んでいる。が、その外ほかは何処どこを見ても、土工たちの姿は見えなかつた。三人の  
子供は恐る恐る、一番端はしにあるトロツコを押した。トロツコは三人の力が揃そろうと、突然  
ごろりと車輪をまわした。良平はこの音にひやりとした。しかし二度目の車輪の音は、  
もう彼を驚かさなかつた。ごろり、ごろり、——トロツコはそう云う音と共に、三人の  
手に押されながら、そろそろ線路を登つて行つた。

その内にかれこれ十間程けん来ると、線路の勾配こうばいが急になり出した。トロツコも三人の力  
では、いくら押しても動かなくなつた。どうかすれば車と一しよに、押し戻されそうに  
もなる事がある。良平はもう好よいと思つたから、年下の二人に合図をした。

「さあ、乗ろう！」

彼等は一度に手をはなすと、トロツコの上へ飛び乗つた。トロツコは最初徐ろに、そ  
れから見る見る勢いきおいよく、一息に線路を下り出くだした。その途端につき当りの風景は、忽ちたちま  
両側へ分かれるように、ずんずん目の前へ展開して来る。顔に当る薄暮はくぼの風、足の下に  
躍おどるトロツコの動揺、——良平は殆ど有頂天ぼとん うちようてんになつた。

しかしトロツコは二三分のちの後、もうもとの終点に止まつていた。

「さあ、もう一度押すじゃあ」

良平は年下の二人と一しよに、又トロッコを押し上げにかかった。が、まだ車輪も動かない内に、突然彼等の後には、誰かの足音が聞え出した。のみならずそれは聞え出したと思うと、急にこう云う怒鳴り声に変わった。

「この野郎！ 誰に断つてトロッコに触った？」

其処には古い印袴天に、季節外れの麦藁帽をかぶった、背の高い土工が佇んでいる。

——そう云う姿が目にはいった時、良平は年下の二人と一しよに、もう五六間逃げ出していた。——それぎり良平は使の歸りに、人気のない工事場のトロッコを見ても、二度と乗って見ようと思つた事はない。唯その時の土工の姿は、今でも良平の頭の何処かに、はつきりした記憶を残している。薄明りの中に仄めいた、小さい黄色の麦藁帽、——しかしその記憶さえも、年毎に色彩は薄れるらしい。

その後十日余りたつてから、良平は又たった一人、午過ぎの工事場に佇みながら、トロッコの来るのを眺めていた。すると土を積んだトロッコの外に、枕木を積んだトロッコが一輛、これは本線になる筈の、太い線路を登つて来た。このトロッコを押しているのは、二人とも若い男だった。良平は彼等を見た時から、何だか親しみ易いような気が

した。「この人たちならば叱<sup>しか</sup>られない」——彼はそう思いながら、トロッコの側<sup>そば</sup>へ駈<sup>か</sup>けて行った。

「おじさん。押してやろうか？」

その中の一人、——縞<sup>しま</sup>のシャツを着ている男は、俯<sup>うつむ</sup>向きにトロッコを押したまま、思った通り快い返事をした。

「おお、押してくよう」

良平は二人の間にはいると、力一杯押し始めた。

「われは中<sup>な</sup>中<sup>なか</sup>力があるな」

他の一人、——耳に巻<sup>ま</sup>煙草<sup>たばこ</sup>を挟<sup>はさ</sup>んだ男も、こう良平を褒<sup>ほ</sup>めてくれた。

その内に線路の勾配は、だんだん楽になり始めた。「もう押さなくとも好<sup>よ</sup>い」——良平は今にも云われるかと内心気がかりでならなかった。が、若い二人の土工は、前よりも腰を起したぎり、黙黙と車を押し続けていた。良平はどうとうこらえ切れずに、怯<sup>お</sup>ず怯<sup>お</sup>ずこんな事を尋ねて見た。

「何時<sup>いつ</sup>までも押していて好<sup>い</sup>い？」

「好いとも」

二人は同時に返事をした。良平は「優しい人たちだ」と思った。

五六町余り押し続けたら、線路はもう一度急勾配になった。其処には両側の蜜柑畑に、黄色い実がいくつも日を受けている。

「登り路の方が好い、何時までも押させてくれるから」——良平はそんな事を考えながら、全身でトロッコを押すようにした。

蜜柑畑の間を登りつめると、急に線路は下りになった。縞のシャツを着ている男は、良平に「やい、乗れ」と云った。良平は直に飛び乗った。トロッコは三人が乗り移ると同時に、蜜柑畑の匀を煽りながら、ひた<sup>すべ</sup>に線路を走り出した。「押すよりも乗る方がずっと好い」——良平は羽織に風を孕<sup>はら</sup>ませながら、当り前の事を考えた。「行きに押す所が多ければ、帰りに又乗る所が多い」——そうもまた考えたりした。

竹藪のある所へ来ると、トロッコは静かに走るのを止めた。三人は又前のように、重いトロッコを押し始めた。竹藪は何時か雑木林になった。爪先上りの所には、赤錆の線路も見えない程、落葉のたまっている場所もあった。その路をやっと登り切ったら、今度は高い崖<sup>がけ</sup>の向うに、広広と薄ら寒い海が開けた。と同時に良平の頭には、余り遠く来過ぎた事が、急にはつきりと感じられた。

三人は又トロッコへ乗った。車は海を右にしながら、雑木の枝の下を走って行った。しかし良平はさっきのように、面白い気もちにはなれなかった。「もう帰ってくれば好い」——彼はそうも念じて見た。が、行く所まで行きつかなければ、トロッコも彼等も帰れない事は、勿論彼にもわかり切っていた。

その次に車の止まったのは、切崩した山を背負っている、藁屋根の茶店の前だった。二人の土工はその店へはいると、乳呑児をおぶった上さんを相手に、悠悠と茶などを飲み始めた。良平は独りいらしながら、トロッコのまわりをまわって見た。トロッコには頑丈な車台の板に、跳ねかえった泥が乾いていた。

少時の後茶店を出て来しなに、巻煙草を耳に挟んだ男は、（その時はもう挟んでいなかったが）トロッコの側にいる良平に新聞紙に包んだ駄菓子くれた。良平は冷淡に「難有う」と云った。が、直に冷淡にしては、相手にすまないと思ひ直した。彼はその冷淡さを取り繕うように、包み菓子の一つを口へ入れた。菓子には新聞紙にあつたらしい、石油の匂がしみついていた。

三人はトロッコを押しながら緩い傾斜を登って行った。良平は車に手をかけていても、心は外の事を考えていた。



その坂を向うへ下り切ると、又同じような茶店があつた。土工たちがその中へはいつた後、良平はトロツコに腰をかけながら、帰る事ばかり気にしていた。茶店の前には花のさいた梅に、西日の光が消えかかっている。「もう日が暮れる」——彼はそう考えると、ぼんやり腰かけてもいられなかった。トロツコの車輪を蹴つて見たり、一人では動かないのを承知しながらうんうんそれを押して見たり、——そんな事に気もちを紛らせていた。

ところが土工たちは出て来ると、車の上の枕木に手をかけながら、無造作に彼にこう云つた。

「われはもう帰んな。おれたちは今日は向う泊りだから」

「あんまり帰りが遅くなるとわれの家でも心配するぞら」

良平は一瞬間呆氣にとられた。もうかれこれ暗くなる事、去年の暮母と岩村まで来たが、今日の途はその三四倍ある事、それを今からたった一人、歩いて帰らなければならぬ事、——そう云う事が一時にわかつたのである。良平は殆ど泣きそうになった。が、泣いても仕方がないと思つた。泣いている場合ではないとも思つた。彼は若い二人の土工に、取つて附けたような御時宜をすると、どんどん線路伝いに走り出した。

良平は少時しばらく無我夢中に線路の側を走り続けた。その内に懷ふかしの菓子包みが、邪魔になる事に気がついたから、それを路側みちばたへ抛り出す次手ついでに、板草履いたぞうりも其処へ脱ぎ捨ててしまった。すると薄い足袋たびの裏へじかに小石が食いこんだが、足だけは遙はるかに軽くなった。彼は左に海を感じながら、急な坂路さかみちを駈かけ登った。時時涙がこみ上げて来ると、自然に顔が歪ゆがんで来る。——それは無理に我慢しても、鼻だけは絶えずくうくう鳴った。

竹藪の側を駈け抜けると、夕焼けのした日金山ひがねやまの空も、もう火照りが消えかかっていた。良平は、愈いよいよ気が気でなかった。往ゆきと返かえりと変るせいか、景色の違うのも不安だった。すると今度は着物までも、汗の濡ぬれ通ったのが氣になったから、やはり必死に駈け続けたなり、羽織みぎを路側みちばたへ脱いで捨てた。

蜜柑畑へ来る頃には、あたりは暗くなる一方だった。「命さえ助かれば——」良平はそう思いながら、這すべつてもつまずいても走って行つた。

やっと遠い夕闇ゆふやみの中に、村外れの工事場が見えた時、良平は一思いに泣きなくなつた。しかしその時もべそはかいたが、とうとう泣かずに駈け続けた。

彼の村へはいって見ると、もう両側の家には、電燈の光がさし合っていた。良平はその電燈の光に、頭から汗の湯氣ゆげの立つのが、彼自身にもはつきりわかつた。井戸端に

水を汲くんでいる女衆おんなしゅうや、畑はたけから帰かへつて来る男衆おとこしゅうは、良平あへが喘あえぎ喘あえぎ走るのを見ては、「おいどうしたね？」などと声をかけた。が、彼は無言のまま、雜貨屋ざいさだの床屋どやだの、明あきらるい家の前まえを走り過すぎた。

彼の家の門口かどぐちへ駈かけけこんだ時、良平はとうとう大声に、わつと泣き出さずにはいられなかった。その泣き声は彼の周囲まわりへ、一時に父や母を集あつまらせた。殊ことに母は何とか云いながら、良平の体を抱かかえるようにした。が、良平は手足をもがきながら、噉すり上げ噉すり上げ泣き続けた。その声が余り激しかったせいか、近所の女衆も三四人、薄暗い門口へ集あつつて来た。父母は勿論その人たちは、口口に彼の泣く訣わけを尋たずねた。しかし彼は何と云われても泣き立てるより外に仕方がなかった。あの遠い路を駈かけけ通して来た、今までの心細さをふり返ると、いくら大声に泣き続けても、足りない気もちに迫おられながら、……

良平は二十六の年、妻子さいしと一しよに東京へ出て来た。今では或雜誌社の二階に、校正の朱筆しゆふでを握にぎっている。が、彼はどうかすると、全然何の理由もないのに、その時の彼を思い出す事がある。全然何の理由もないのに？——塵勞じんろうに疲れた彼の前には今でもやはりその時のように、薄暗い藪くさや坂のある路が、細細と一すじ断続している。……

## 「一冊堂・青空文庫」について

「一冊堂・青空文庫」は、青空文庫を紙の書籍で読むことができるよう、公開されているデータを pdf 形式に変換して、無料で配信させていただいております。変換に際して、旧仮名使い、ルビ等がうまく変換されない場合があります。できるだけ修正するようにしておりますが、お気付きの場合、ご連絡いただければ、早急に修正データをアップロードいたします。ご協力いただきますようお願い申し上げます。

\*\*\*\*\*

青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp>) は、著作権の消滅した作品や「自由に読んでもらってかまわない」とされたものを、テキストと XHTML（一部は HTML）形式で公開しているインターネット電子図書館です。青空文庫は、そのサイト運営も含め、電子データの作成や校正作業などはボランティアの皆さんの活動によって支えられています。



---

一冊堂・青空文庫 pdf データ

2016 年 3 月 15 日 第一期製作

原 稿 青空文庫

発行者 佐藤 聖

発行所 一冊堂

〒165-0025  
東京都中野区沼袋 2-32-5 幸荘 C 室  
mail : [issatudo@gmail.com](mailto:issatudo@gmail.com)

---